

静岡県立大学短期大学部

研究紀要 33-W 号 (2019 年) -1

子どもの歌に含まれるジェンダーの検討
——人称「ぼく」と「わたし」に着目した分析から——

A Gender Reserch for Children's Song
—Through Analysis Focused on the First Person in Japanese—

山本 学 (静岡県立大学短期大学部)

掛本 健太 (静岡大学大学院教育学研究科大学院生)

YAMAMOTO Manabu, KAKEMOTO Kenta

Abstract

The purpose of this study is to clarify the gender gaps included in children's song and relationship between it and required gender roles from the society. For that, we analyzed the words to children's song with focusing on its first person. Because "Boku" and "Watashi", which is the first person in Japanese, often indicate the sex of that person.

We analyzed 599 children's songs. Among them, 54 songs included the first person. We divided the 54 songs into "Boku-type" and "Watashi-type". And, we took out keywords from each song and categorized theirs.

Result of this analyzed, there is gender gaps in children's song. For example, the song that is hero as the boy has many such words as going to the future and dream cheerfully, but the song that is heroine as the girl has many such descriptions as gently and calmly. This result is similar to the result of the previous study.

So we concluded there is gender gaps in children's song, and they are similar to gender roles that required by the society. And it is thought to affect for children's think about gender roles.

Keywords :child education, children's songs, lyrics, first person, gender

キーワード：幼児教育、子どもの歌、歌詞、一人称、ジェンダー

1. はじめに

本研究は、子どもの歌における一人称に着目し、一人称の違いによってどのような歌詞の特徴があるのかを明らかにすることを目的としている。

子どもの歌には、童謡、唱歌、テレビ等のメディアで使用されているもの、わらべ歌など様々なものがある。原（2009）によれば、日本の子どもの歌は、明治初期から第二次世界大戦までの間において、大まかに「国策としての子どものうた」と「子どものための子どものうた」という2つの大きな系譜に大別できる¹⁾。「国策としての子どものうた」は、祝日唱歌や軍歌などがあり、中央集権国家を確立するための手段として利用されてきた側面がある。また、森（2010）によると、音楽の歌詞は、音楽を聴く際に重視される一要素であり、情動の部分に影響を与えることが明らかとなっている²⁾。これらのことから、子どもの歌の歌詞も、子どもの思想への影響があると考えられる。

保育の表現領域でも、教育の方法の1つとして音楽が用いられることもある。「保育所保育指針」の5領域のうち「表現」の項では「豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにする」とある³⁾。そのため、歌唱活動を取り入れている保育所、幼稚園、認定こども園も多くある。同保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領における内容では、「音楽、リズムやそれに合わせた体の動きを楽しむ」や、「歌を歌ったり、簡単な手遊びや全身を使う遊びを楽しんだりする」という記載もある⁴⁾⁵⁾。保育の現場においては、音楽は重要な役割を担っているものである。

こういった保育における音楽活動では、子どもの歌が使用される。そして子どもの歌には、一人称が使用されている場合がある。日本語における一人称は性別を示すことが多い。性別によって歌詞の内容に違いがある場合、歌詞は思想へ影響する面もあり、子どものジェンダー観を形成する一つの要因として子どもの歌が作用しうる可能性がある。

そこで、本研究では、子どもの歌の歌詞に含まれる一人称を調査し、歌詞全体の内容と比較することで、子どもの歌にジェンダー観が含まれているかについて明らかにする。

2. 歌詞に含まれるジェンダー—先行研究の検討から—

歌謡曲に含まれるジェンダーを分析したものとして、山川 (2009) がある⁶⁾。この研究では、1968 年から 1994 年の間に、ヒット・チャートで 1 位を獲得した歌謡曲を、「男のうた」と「女のうた」に分け、分析を試みている。歌謡曲はその歌詞世界において、男の言葉遣い「ーだ」や、女の言葉遣い「ーの」などを使い続け、「男のうた」と「女のうた」を生産し続けてきたと山川は結論付けている。言葉遣いという世界において、歌謡曲は確かに、世間におけるいわゆる「男らしさ」「女らしさ」を反映し続けているのである。

音楽教育において使用される歌曲に着目した研究には、山中ら (2003) の研究がある⁷⁾。山中らは 1998 年版「学習指導要領」準拠の小・中学校音楽科教科書の分析を行なっている。また、音楽教科書に掲載されている歌唱教材 494 曲に対し、性別の主体について調査している。この調査、分析の結果から、教科書内の男女におけるそれぞれの特定のイメージとしては、男性は勇敢である、たくましい、希望にあふれるなどの姿があげられている。対して女性は、美しいもの、一つの場所に留まり管理していく、育児するというイメージがあげられている。さらに、この研究では、作詞者・作曲者の性別も分類している。1980 年から 1994 年版の教科書では、女性作曲者は 0%であるのに対して、2002 年度版では、全体の 5.5%になっていると指摘されている。教科書作りにおいて、男らしさ女らしさのジェンダーの視点が徐々に浸透していることがここからうかがえる。

同じく、音楽教育に着目した研究として、尾崎 (2014) がある⁸⁾。山中らが小学校、中学校の音楽科教科書を分析したのに対して、尾崎は、高等学校音楽科教科書に着目した研究を行なっている。この研究では、高等学校芸術科音楽 I の教科書に掲載されている「ヒット曲」を分析対象に、ヒット曲にどのような教育的メッセージが含まれているのかについて、「男女観」という視点から分析をしている。尾崎の分析によれば、教科書に掲載されているヒット曲は、①恋愛の進展を願うもの、②恋愛の回想・わかれ、③本音を語る男性像の 3 つである。これらには、男女の平等やジェンダーフリーといった男女観による曲が選択され、掲載されているという共通点があると尾崎は結論づけている。例えば、①恋愛の進展を願うものでは、男性から「ついてこい」と優位に女性に問いかけるような楽曲はない。「ありがとう」や「見上げてごらん夜の星を」のように、二人の関係が対等で、支え合っているような楽曲が採用されている。

以上の研究から、歌曲の歌詞には、男女による違いが反映されているように

思われる。それは、学校における音楽教育で使用される歌曲でも例外ではない。しかしながら、それは、社会背景や年代の違いの影響を受ける可能性もあることが分かる。同様の傾向は、幼児教育や保育で使用される子どもの歌にもみられるのだろうか。

3. 研究対象及び方法

本研究では子どもの歌 559 曲を分析対象とした。ここでは「子どもの歌」の定義を収録された曲集のタイトルに「子どもの歌」という言葉が表れているものとした。対象 599 曲のうち、一人称が表れた曲数を調査した。その際、以下のようなことを定めた。

- ①「ぼくら」、「ぼくたち」は要素として同じと考え、1つにまとめる。
- ②歌詞には表れないがタイトルに一人称が入っているものもカウントする。
- ③アニメソングのうち、キャラクターそのものを歌ったものは一人称固定なため、対象外とする。
- ④単数と複数に分けて集計したが、「ぼく」、「ぼくら、ぼくたち」を<ぼく型>として、「わたし、わたしゃ」、「わたしたち」を<わたし型>としてそれぞれ一つにまとめ考察をする

以上の4つに従い、それぞれの一人称が表れた曲ごとに、1番を中心に歌詞からそれぞれ4から9つ程度のキーワードを抽出し、カテゴライズすることによって傾向を調査した。

4. 結果及び考察

4.1 一人称

4.1.1. 一人称が表れた曲

表1は一人称とその一人称が表れた曲数をまとめたものである。研究対象とした子どもの歌 559 曲中、一人称が表れていた曲は 54 曲であった。内訳として、「ぼく」が 21 曲、「ぼくら、ぼくたち」が 18 曲、「ぼく、ぼくら（両方）」が 1 曲であり<ぼく型>は計 40 曲見られた。対して、「わたし」が 11 曲、「わたしたち」が 1 曲で<わたし型>は計 12 曲見られた。結果として、<わたし型>に比べ、<ぼく型>の方が子どもの歌には多く表れていた。

表1 一人称が表れた曲数

一人称	曲数	(計)	曲名
ぼく	21	40	友だち、はさみとぎ、バラが咲いた、ぼくはキャプテン、ぼくのひこうき、ぼくのミックスジュース、大きなうた、まあるいいのち、牧場のこうし、ジャングルポケット、あしたのあしたのまたあした、若葉の歌、若い力、電車ごっこ、マーチングマーチ、パパとぼく、お化けなんてないさ、まっかな秋、クラリネットをこわしちゃった、サッチャン、にんげんっていいな
ぼくら、ぼくたち	18		手のひらを太陽に、ゆかいな仲間、雪とこども、朝の歌、虹のむこうに、旅立ち、友達だから、ビブラコンパニー、ぼくらのクラス、ぼくらの町は川つぶち、森へ行きましょう、夢の世界を、線路は続くよどこまでも、うちゅうせんのうた、せかいじゅうのこどもたちが、ともだち賛歌、勇気100%、ありがとうの花
ぼく、ぼくら (両方)	1		大空賛歌
わたし、わたしや	11	12	さんぽ(勝承夫)、十五夜お月さん、てるてるぼうず、人形、花や、ふるいもくば、ママのおひざ、やさしいおかあさま、山の音楽家、うれしいひなまつり、大きな栗の木の下で
わたしたち	1		山の子のうた
ぼく、わたし (両方)	2	2	花と小父さん、アイスクリームのうた
合計		54	

4.1.2.一人称と作詞者の関連

「ぼく型」が「わたし型」よりも3倍以上多く表れたこの結果について、その原因が作詞者の性別が関係している可能性があるため、追加の調査を行った。

調査に際して、いくつかの条件を定めた。まず、作詞者の性自認については不明なため、今回は氏名等で判断できる範囲とした。また、ペンネームを使用し作詞者の本名がわからない場合もペンネームから判断をした。作詞が団体名

などで表れていて氏名でないもの、作詞が不詳であるもの、文部省唱歌などは「その他」とした。

一人称の表れた 54 曲から＜ぼく型＞と＜わたし型＞に分類できない 1 曲を除いた 53 曲を対象とした。表 2 はその結果である。作詞者の性別と歌詞の一人称で分類した結果、男性の作詞者が 39 曲、女性の作詞者が 10 曲となり、作詞者に関しては予想通り男性の方が多かった。

しかしながら、男性と女性の作詞者のそれぞれの一人称の使用を見ると、男性の作詞者が「ぼく」を、女性の作詞者が「わたし」を使用する結果となっていない。男性の作詞者は＜わたし型＞の 12 曲のうち 8 曲に該当し、対して女性の作詞者は、10 曲中 9 曲が＜ぼく型＞となって表れた。このことから、必ずしも作詞者の性別に一人称が影響されているわけではないと考えられる結果となった。

表 2 作詞者の性別と一人称の関係性

作詞者の性別	歌詞の一人称	曲数	曲名
男	ぼく型	30	手のひらを太陽に、友だち、バラが咲いた、ぼくはキャプテン、雪とこども、ぼくのミックスジュース、朝の歌、大きなうた、虹のむこうに、旅立ち、友達だから、ビブラコンパニー、ぼくらのクラス、ぼくらの町は川っぶち、牧場のこうし、ジャングルポケット、あしたのあしたのまたあした、若い力、線路は続くよどこまでも、お化けなんてないさ、まっかな秋、サッチャン、にんげんっていいな、うちゅうせんとうた、せかいじゅうのこどもたちが、友達賛歌、勇気 100%、電車ごっこ、マーチングマーチ、ありがとうの花
	わたし型	8	さんぽ（勝承夫）、十五夜お月さん、てるてるぼうず、ふるいもくば、ママのおひざ、山の音楽家、うれしいひな祭り、大きな栗の木の下で
	ぼく、わたし	2	花と小父さん、アイスクリームのうた
女	ぼく型	9	はさみとぎ、ぼくのひこうき、ゆかいな仲間、大空賛歌、まあいいのち、夢の世界を、若葉の歌、パパとぼく、クラリネットをこわしちゃった

	わたし型	1	花や
その他		3	森へ行きましょう、人形、山の子のうた
合計		5 3	

4.2.<ぼく型>と<わたし型>の特徴

<ぼく型>の曲から抽出したキーワードについて分析を行なった。表3はその結果である。

表3 <ぼく型>の曲に表れたキーワードのカテゴリー一覧

カテゴリー	該当するキーワード	
音楽	大声/声も高らかに/大騒ぎ/やっほっほ/一緒に掛け声/ぼくらのこえ/うたえ/うたうこと/うたう/うたってくれ/歌おうよ/うたう/愛の歌/うたう/うたつよ/うたえば/うたえ/うたったら	
未来	夢だよ/夢と希望/ぼくらの夢は/夢をつないでる/ぼくらのゆめ/僕たちの夢/夢の世界/明るい明日へ/未来を込めて/僕らの夢/でっかい希望/輝き希望に満ちて	
手(つなぐ)	腕組めば/手と手をつなぐ/手をつなぎ/手を取り合って/みんなと手を取って	
友達	友達、仲間	友だち/なかまたち/素敵な仲間/友達だ/友だちになろう/お化けの友達つれて/みんな/友達だから/愉快的な仲間/地球の家族/団結を/誰でも仲良し/あつまれ/僕らは友達/みんなの力を/僕らは仲間/友達なんだ/語り合おう
	競争、乱暴	競え/けんか/つよきもの/スポーツマン/一等賞/けちらして/ぶちこんで/すりきず
元気	元気にゆこう/げんきよく/げんきよく/びりっこ元気だ/元気が出る/げんきよく/君も元気/ぼくも元気	
移動	どこでも行けるさ/さあでかけよう/ほんとに行こうよ/一緒においでよ/出発/白く続く道/青春という名のこの旅路/君と歩いていこう/すすめ/駆け巡る	
心情	笑う/楽しい	笑うんだ/わらいとわらい/いつも楽しい/歓喜あふれる/ほほえみかわす/わらったら/みんながわ

		らってる/にこにこ/笑ったら/楽しく/うれしい
	心	心だよ/ころころ/心の窓を
	怖い	ぼくだってこわいな/何もこわくない/おそれる ことはない/おそれはしない
	怒る	怒っている/怒られる
	寂しい	さびしいな/さみしかった
	悲しい	泣いたら/悲しい
	あいらしい	あいらしい
	頑張り	力いっぱい/まけないぞ/熱意
生きる	生きている/生きている/大切な命/生きている	
仕事、力、若さ	しごとが先だ/働く力/若い力/しごと/僕ら若者/力だよ/もえよ若人/青春	
家族	パパからもらった/パパと	
その他の人	あの子が好き/むすめさん/キャプテン	
運転手	おひげの船長さん/運転手はぼくだ	
その他	たたえよう/おはなし/腫あかるい/ぬくもり/マーチングマーチ/自由/どんないいことあるんだろう/明るくなった/ぼくらのまち/胸を張れ	

＜ぼく型＞においてカテゴリーは、「音楽」「未来」「手（つなぐ）」「友達」「元気」「移動」「心情」「生きる」「仕事、力、若さ」「家族」「その他の人」「運転手」であった。特に、「音楽」、「未来」、「仲間」「元気」がよく表れている。

＜ぼく型＞と同様に、＜わたし型＞の分析を行なった。結果は表4である。

表4 ＜わたし型＞の曲に表れたキーワードのカテゴリー一覧

カテゴリー	該当するキーワード	
音楽	ともに歌おう/うたごえ/山の子のうた/うたがすきだよ/やさしい音/ うたえ/おんがっか/ことのうた/こもりうた	
夢	いつかの夢/夢なんだ	
顔	目はぱっちり/小さいくちもと/きれい/色白で	
願望	遊びましょう/さそわれて/泣かないで/明日天気にしておくれ/もう一度会いたいな	
心情	嬉しい	うれしい、おもしろそう、楽しい
	優しい	やさしい

	心	こころもはずみ
	かわいい	かわいい、いつもきれい
	好き	好きよ
	慰め	なぐさめる
家族	お嫁にいらしたねえさま/妹/かあさんに/おかあさま/ママ/ばあや/にいさん/ちいさなおとうと	
お（丁寧語）	おうた/おはなし/お花/おまど/お嫁にいらしたねえさま	
人形	てるてるぼうず/人形/木馬/ひな（人形）	
においや花	においます/いいにおい/においいいな/お花/きれいな花	
その他	栗の木/照らす/だっこ/願いをきいたなら/おっぱい	

＜わたし型＞において表れたカテゴリーは、「音楽」「夢」「顔」「願望」「心情」「家族」「お（丁寧語）」「人形」「においや花」であった。＜わたし型＞の標本数は＜ぼく型＞に比べ少ないが、「音楽」「家族」「お（丁寧語）」「人形」「においや花」などが中心的に表れた。

＜ぼく型＞＜わたし型＞に共通して中心的に表れたカテゴリーが「音楽」である。中でも、歌うことに関するキーワードが多く見られた。子どもの歌というのは、その性質上、歌をキーワードにしていることが多いことが分かる。しかしながら、共通のカテゴリーではあるが、歌われ方については、＜ぼく型＞と＜わたし型＞で違いがみられる。カテゴリー内の該当するキーワードを見ると、＜ぼく型＞では「大声」「声も高らかに」「大騒ぎ」など、声を大きく出して元気よく歌うことが連想されるキーワードが歌詞の中に表れている。一方＜わたし型＞においては、「やさしい音」「こたりのうた」「こもりうた」など、小さな声や優しい声で歌うことを連想するようなキーワードが歌詞の中に表れている。＜ぼく型＞と＜わたし型＞では、想定される歌い方が違っているのである。これは男性の「特徴」として語られる「元気の良さ」と、女性の特徴として語られている「おしとやか」というものと一致すると考えられる。

「心情」というカテゴリーについても共通して表れた。これは、歌の気持ちを表現するという側面から表れたものであると考えられる。このカテゴリーについては、心情ごとにさらに細かく分類をすることができた。それらを見ると、「楽しい」と「うれしい」など＜ぼく型＞と＜わたし型＞で類似する心情が歌詞の中に表れていることが分かる。一方で、相違している心情もある。＜ぼく

型>では、「寂しい」「悲しい」など負の感情を示すキーワードが多く見られた。これは、「男性像」として語られていない。その反面で、<ぼく型>には「頑張り」というカテゴリーが見られるのに対して、<わたし型>には「かわいい」「やさしい」などのカテゴリーが見られた。これらは、社会的な「男性像」「女性像」として語られるものと類似しているものである。

また、類似するカテゴリーとして<ぼく型>に表れた「未来」というカテゴリーと、<わたし型>に表れた「夢」がある。しかしながら、<ぼく型>での「未来」というカテゴリーに表れているのは、未来に向かって進んでいくようなイメージをもつ歌詞であるのに対して、<わたし型>の「夢」は夢や希望を持っているだけであり、向かって進むようなキーワードは表れていない。<ぼく型>の「未来」のイメージは、小中学校の教科書を分析した山中ら（2003）の研究で示された男性に関する歌詞の傾向と類似（「希望にあふれる」など）している⁷⁾。これらのことから、子どもの歌のみでなく、歌唱教材においては、男性はより未来に向かって進んでいくというイメージが含まれているといえる。

<ぼく型>独自に表れたカテゴリーとしては、「元気」、「移動」、「生きる」、「仕事、力、若さ」、「運転手」である。「ぼく」という一人称には、仕事をする姿や、元気な姿が結びついている。

対して<わたし型>独自に表れたカテゴリーは、「お（丁寧語）」、「人形」、「においや花」であった。「わたし」という一人称には、丁寧には話す姿や、花や人形といったものと通じる姿が結びついていることが分かる。

以上のことから、特徴として、<ぼく型>では、友達と一緒に夢や希望をもって、元気に歌いながら前へ進んでいく様子が歌われていることが見てとることができる。対して<わたし型>では、優しい声で歌いながら、花や人形などを愛でる様子が歌われていることを見てとることができる。

5. 終わりに

子どもの歌の一人称に着目して、子どもの歌に含まれるジェンダー観について分析を行なった。その結果、男性を示す<ぼく型>には、元気なイメージや、希望にあふれるイメージが含まれていた。これは、先行研究の小学校や中学校の教科書の分析結果⁶⁾と類似する結果となった。女性を示す<わたし型>では、優しいイメージや、丁寧な言葉遣い、<ぼく型>にはない花や人形などが含まれていた。これらは、先行研究とは違う結果であったが、社会的なジェンダー

観と一致するものであると考えられる。

以上のことから、子どもの歌の 10%程度しか表れない一人称ではあるが、子どもの歌には社会的なジェンダー観が含まれている。それらを歌うことで、子どもたちに男の子は男の子らしく、女の子は女の子らしくという考えが刷り込まれてしまうことが影響として考えられるだろう。このような子どもの歌は、現存している社会の中のジェンダー観を、子どもの中に形成する一つの要因として作用している可能性があると考えられるのではないだろうか。

しかしながら、今回の分析の課題として 3 点があげられる。1 つは、年代ごとの分析を行っていないことである。山中の先行研究からわかるように、ジェンダー観の音楽教材への反映は年代ごとに変化している⁸。しかしながら、本研究は作曲年を考慮せず、すべてを「子どもの歌」として分析を行なっている。さらに作曲年で分類し、傾向を分析する必要があるだろう。2 つ目は、＜わたし型＞のサンプル数が少なかったことである。3 つ目は、資料の数的調査にとどまり、実際に歌う子どもたちに接していないことがあげられる。そのため、実際に子どもたちに子どもの歌は影響しうるのか、子どもたちは子どもの歌に対してどう感じているのかなどについては明らかとなっていない。今後、教育実践の場における研究を重ねていく必要があるだろう。

【文献】

- 1 原祐子 (2009)「保育における子どものうた」『四天王寺大学紀要』第 47 号、pp.189-205.
- 2 森数馬 (2010)「日常の音楽聴取における歌詞の役割についての研究」『対人社会心理学研究』第 10 号、pp.131-137.
- 3 厚生労働省『保育所保育指針』、2017 年、フレーベル館、p.21
- 4 前掲注 4、p.21
- 5 文部科学省・厚生労働省『幼保連携型認定子ども園教育・保育要領』、2017 年、フレーベル館、p 24.
- 6 山川欣也 (2009)「歌謡曲のジェンダー：『わたし』の不在が意味すること」『長崎外大論叢』(13)、pp.217-232.
- 7 山中裕一郎、手塚綾、山下貴幸、渡辺亜希子 (2003)「ジェンダーの視点による音楽科教科書の分析：1998 年版『学習指導要領』準拠小・中学校音楽科教科書の分析と考察」『信州大学教育学部紀要』110 巻、pp.21-31.

8 尾崎祐司 (2014)「歌唱教材としてのヒット曲に潜む男女観—高等学校教科書掲載の歌詞傾向—」、『上越教育大学研究紀要』33 巻、pp.237-247.

(2019 年 1 月 7 日 受理)